

★レズ
女性同士

★憑依・乗っ取り

★ふたなり
悪堕ち

東方Project 18禁イラスト(CG)+ノベル

リファイン-ReFiNe-

サークル：プルート
製作者：不動心

ある日の夕方。

「……………美鈴」

「はあい、何でしょうか？」

「ねえ」



「やだなあ、今日はしっかり仕事してますよ」

慌てて口を噤もうとする美鈴だったが、咲夜は鋭く睨みつけた。何か考え込むように瞳を閉じて黙り込み、言葉を選んでる。

「……………今日も、あの人間の子が来たのね」

何かを避けるように、咲夜は慎重に話を切り出していた。それを知ってか知らずか、美鈴は軽やかに応える。

「ああ、あの子ですか！ 今日も来てましたね」

——やはり、と咲夜は大きく溜め息を吐いた。

あの人間、どこか底が見えない。
紅魔館というだけで、本来はヒトも寄り付かない場所だというのに。
いつも美鈴に会いに来ては、談笑やら何やらをして帰る。
武術の達人というわけでもなさそうだし、目的はきつと……………



特に怪しい点は見られないと美鈴は言いつが——。
咲夜は、彼が来る度、どこか心が落ち着かなかったのだ。

「そんなに心配しなくても、大丈夫ですよ」



優しく微笑み掛ける女性、彼女の名前は紅美鈴ほんめいりんという。

吸血鬼が住まう「紅魔館」の門番をしているのだが、その素性は分かっていない。ただ佇んでいるだけのようにも見える女性だが、その実力はかなりのモノ。さすがに門を任されているだけのことはあるが、何の妖怪かも不明である。

いつからいるのかも、何故この番を任されているかも分からないが、ただひとつだけ確実なことがあった。それは、女性として魅力的だということだ。

いつも身体を動かしているだけのことはあつてか、引き締まったスタイルは眼を見張る。長く鮮やかな紅髪を揺らし、豊かな肢体をしなやかにくねらせ、外敵を排除している様を見れば——オトコならば、一度は話してみたい。

ヒトではあり得ない美貌を持つているから、高嶺の花かと思いきや——。時間さえあれば誰とでも会話するし、申し込まれば手合いも行う。いつでも誰かを気に掛けているような性格は、人妖問わず好かれていた。

「あの子の気は、悪い気じゃないです。
むしろ——何だか、どこか……あつたかいような……」

あの子、とは——最近美鈴と知り合つて、よく会いに来るようになった人間の少年のことだ。

——彼女から見たら、少年なのだ。

例え思春期を迎え、年頃に差し掛かろうとしているモノであつたとしても、少年ほのかな恋心でさえも、美鈴にとつては「あつたかい」で終わる。

美鈴とて妖怪——彼女は相手の「気」を感じ取る能力を持っている。この「気」を用いて戦つこともあるし、普段から扱えるほどに熟練されていた。

「私には、そう見えない……何か、善からぬモノを感じる」

そう呟く女性——いざよい十六夜 咲夜は、小さく溜め息を吐いた。

彼女は「紅魔館」のメイド長として過ごす傍ら、主である吸血鬼、

「レミリア、アスカレット」を狙う輩の排除も行っている。

無論、お世話の全般も彼女の役目であるのだが、咲夜は時間を止める能力を持つていた。人間でありながら、咲夜は異能の類であった。

それ故に、彼女は人間が寄り付かない「紅魔館」を選んだのかもしれない。

ただ、その美しさは極上のひと言に尽きる。

立つているだけでも気品が溢れ、麗しく器量に優れる容姿、美鈴を太陽とするならば、咲夜は月である。銀髪を美鈴と同じ髪型にしているあたり、彼女たちが互いに意識し合っているのではないかと勘繰ってしまう。もつとも、決して口に出すことなどないが……

容姿だけでなく、彼女ひとりですべてがまかなえるほどによく働くという。

そして何より、主と館の全てを大切に想う、忠臣でもあった。

たとえ魔の存在であろうと、主への想いはある。

その中でも特に——。

今、こうして美鈴と話している時、咲夜は最も心が安らいでいた。

寝ている時でも、お嬢様の世話をしている時でもなく、美鈴との時間。

瀟洒を賣く咲夜は、決して口には出さないが……この時間が最も大事だ。

だから——最近よく訪れるようになった、人間の子を

疎むように思っていた。決して私情だけでなく、彼女の

カンというモノが、館にとって何か悪いことをしでかしそうで、

眼という警戒の刃を光らせている。

「私は、彼のこと——信用していないから」



たとえ同じ人間という種族であっても、簡単には心を開かない。……それは、咲夜がここに来るまでに受けた仕打ちもある以上仕方の無いことかもしれない。彼女は、鋭いナイフの切っ先のような言葉を、眉ひとつ動かさずに言い放てるほど、近寄り難い存在でもあった。

「そんなこと言って♪ お菓子とか持って来てくれるじゃないですか」

「早く帰って欲しいからよ」

「咲夜さんも一緒に食べればいいのに」

「そんな暇
ありません」



美鈴はどこまでも大らか——快活で明るく、咲夜は鋭い空気のまま呆れていた。

このふたり、対照的だったけど……互いに、惹かれ合っている。

確かに咲夜は、一応あの子のことを客人として扱い、お茶菓子のひとつやふたつ、置いていったことがある。その際には、美鈴の職務を邪魔しないようにとか、館に近付いたことを口外しないようにとか、お小言を添えるのがお約束になっていた。まるで子供の友人が遊びに来たのを窺う親姉妹のようで——しかし。

咲夜の大事なモノである、美鈴が取られてしまうような……危機感もあった。

そんなことはないと言いつつ、咲夜の心が否定し、心を落ち着かせようとするも……必ず見に来てしまうのが、乙女心というモノであった。

咲夜もやはり、人間——ヒトの子であったのだ。

「もう、からかうなら帰るからね」

「ええ、もう戻っちゃうんですか」

寂しそうな美鈴に、
咲夜は踵を返した。



「……たまには、ゆっくりお話し——しましょうね」

「そうね、お嬢様のお許しが頂けるなら……さあ、美鈴も戻った戻った」

音も無く、咲夜は紅魔館の中へと進んで行く——。

「咲夜」
「あら、お嬢様。おはようございます」
「どこに行ってたんだ」

「油を売っておりました、外で」

咲夜が紅魔館の中に戻り、歩いていると。ふと、声をかける存在と出会う。

彼女こそ、この館の主。
幼い身体つきからは考えられないほどの力と恐怖を身に宿す——とは考えにくい、ただの少女に見えるが、主なのだ。

黒いコウモリの羽根を退屈そうにはためかせ、眼に悪い紅い廊下を舞台に、靴を鳴らしていた。

彼女こそ、レミリア・スカレット。
人々に恐怖を振り撒き、変わらない日常の中で退屈をばら撒いている、永遠に幼き紅い月である。



「よく主の前で、堂々とサボってると言える」

「そんなこと、とやかく言うお嬢様ではありませんから」

「夫した忠誠心だ」

「そんなに褒めなくても」

まるで悪びれた様子もなく、咲夜は淡々と述べていた。
普通の人間ならば畏怖しよう状況も、彼女にとつてはいつものこと。
そんな忠実な従者に怒るわけでもなく、レミリアは平穩を保ったまま手で何かを合図した。吸血鬼にとつても、これは日常なのだ。

「ああ、お茶ですね—— お持ちしましょう」

「私の部屋でいいよ」

「はい、かしこまりました」



言葉少なでも、主従の関係で分かる会話。
短いひと時であるが、彼女たちの夜はこれから始まる。
今日もまた、紅魔館を夜と月が覆っていく……。

ある日。

「あれ、貴方は……また遊びに来てくれたんですか」



今日もまた、重厚な紅魔館の門の前に、美鈴は立っていた。

見慣れた人間の少年が近付いても、彼女は身構えることなく悠然と佇む。彼女が妖怪といつても、無暗やたらにヒトに危害を加えることはない。心優しく、そして美しい女性——ゆえに。

少年は顔を赤らめて、募り積もった想いを打ち明けていた。

ヒトの身である上に、少しも美鈴と釣り合わない自分だと、正直に言っていた。それでも……近付けるだけで幸せであったとしても。

これまでの想いが堰を切ったかのように溢れ出し、言葉となって流れ出た。

少年自身、心臓が破裂するような心地だった。

それでも——緊張を察したわけでもなく、そうしてほしいと望んだわけでもないのに、美鈴はただ微笑みながら、少年の想いを聞き届けていた。

「お気持ちは、伝わりました……ありがとうございます……」

——美鈴は、静かにそう呟いた。

少年の眼をじっと見て、いつもの優しい笑みで傷付けられないように。

ヒトとして彼女たち妖怪よりも短い生涯しか経験出来ない、少年にも分かった。

美鈴は……自分に、振り向かなかつたのだ。

「……でも——」

何かを言い掛けたが、それ以上を少年が聞くことは出来ない。このまま清々しい気持ちのまま、別れたい。そう思ったはずなのに——口が滑っていた。

「ええっ!? す、好きなヒトですか……うーん……」



悲しそうな鬱困気を消すように、美鈴は大仰な反応を示した。

これだけのスタイルに気前の良さ、これまで数多の男に言い寄られて来ただろうに、既に愛する仲がいるとは思えない、それくらいは少年も話して分かった。

もしかすると、彼女に試合で勝たなければならない、とか――。

そうなれば、少年の淡い可能性は粉微塵に碎けるだろう。

彼女の強さは、よく知っているつもりだった。片手相手でも負けるかもしれない。

「そ、そうですねえ……いるには、いるんですが……はは」

どうやら、杞憂だったようだ。しかし……。

あからさまに、今までとは態度が変わった。脳裏によぎったモノの姿に、ほんの少しではあるが美鈴の頬が紅らむ。この反応、本当に好きな人物がいると見て間違いないだろう。

それでも、少年はソイツをどうしようとは思わなかった。

及ばなかったモノを持つている人間（妖怪かもしれない）が、彼女の心を射止めた。それだけのことだ。

何より、今の美鈴はとても幸せそうで、見ていて微笑ましい。この笑顔に、救われた。

美鈴の幸せを願うと告げ、同時にこれからも時々訪れていいか――少年は問う。

「ありがとうございます。もちろん、構いませんよ」

嬉しかった。

少年は破れた想いなどこの場に捨て去り、吹っ切れたように何かをしたかった。何でもいい。彼女が喜んでくれれば――これからも紅魔館に行きたい。

また、美鈴に会うために……少年は誰に追われているわけでもないのに、急いで帰路を駆ける。手を振る美鈴に背を向け、涙を拭いながら……。

「—待ちなさい」

「突然呼び止めてしまったって、ごめんなさいね♥
大丈夫、妖しいモノではございませんの♥ ねえ、ボク……」

本当に——突然だった。

紅魔館の近くには生い茂る森がある。無我夢中で走っていた少年は、
妙齢の女性らしき声に、はっと振り向いた。

そこにいたのは、薄暗い森の中でも輝いて見える、長い金髪を揺らす美女だった。
眼を合わせれば吸い込まれるどころか、呑み込まれそうになる錯覚を覚える。
慌てて視線を逸らせば、今度は薄い布に包まれているだけの肢体が映り込んだ。

明らかに、人間ではない。妖艶な雰囲気、どこが妖しくないモノか。

幻想郷にいる住人には、美鈴のように素性の分からない妖怪もたくさんいる。
美しい女性に見える彼女もまた、人も魔も喰らっているのだろうか。
その圧倒するような体軀を見せつけられては、少しもこの場にいたくない。

逃げたかった——今は、特に。

「残念だったわね♥」



何を言われたかと思えば——少年は驚きと共に、怒りを露わにしていた。
この妖怪……今の今までの光景を見ていたのか。嘲笑うような瞳で——
拳を握り、睨み付けても……妖怪は微動だにしない。
このまま人生が終わってもいい。せめてあの綺麗な顔に一矢報いて——。

「うふふ、お待ちなさいな♥ そう死に急ぐことないわ♥
ボクには、真実を見せてあげる……そう、アナタの見た世界を……」

妖艶な妖怪は突然、空を切る。その細く長い、美しい手を横に薙げば——。
何も無い空間に現れたのは、気味の悪い「裂け目」だった。
無数のギョロついた、ヒトの背丈ほどもある大きな瞳が蠢くのを見て、少年は
一歩退く。しかし、裂け目の中にある光景を見て——釘付けになった。

「見えるかしら？ これが真実、アナタの知らない世界……♥
見たかったのは、この笑顔……さあ、覗いてご覧なさいな♪」

切り裂かれたように口を開いた空間を覗くと——そこに見えた光景。
美鈴の姿だった。何度も通った場所だ、紅魔館の門前に違いない。

美鈴は、笑っていた。



……間違いなく、少年に見せる顔ではなく。
そうか、これが恋する乙女の笑顔というモノか。
本当に見たかった笑顔が、ここにはあった。
安心する気持ちと同時に、一緒にいる相手に目が留まった時——。
少年は、心を握り潰されるような感覚に襲われた。

「分かるでしょう？ 彼女、この咲夜という女性が好きみたい♡」

妖艶な女性が、分かり切ったことを言った。

この笑顔を見れば、分かる。
よく少年と美鈴が話をしている時、お茶菓子を持って来てくれていた。
紅魔館に住む変わった人間で、メイド長をやっているとか言っていた。
そして——咲夜は、美しかったのだ。

それを知って、傷口が深まらずに済んだ。

もし意中のモノが男だったならば、それより素晴らしい魅力を身に付け、
対抗出来たかもしれないが……女性相手では敵うまい。
まず根本からして違うではないか——

「手に入れたくはないかしら？」

え？

言葉に、戸惑う。



「この美鈴という子、その恋心……全て、それを一身に受けて、
貴方の欲望を満たす術を、私は知っている」

知ってしまったら、戻れない——少年のヒトとしての本能が、そう告げていた。不気味な雰囲気を感じ始め、嗜虐的に嗤う女性が、まともだとは思えない。この妖怪の言葉を聞いてしまったら最期……二度と日常へは帰れないだろう。

しかし——。

「貴方、きつと来るわ♥今とつてもソノ顔をしてる♥
恐怖、葛藤、欺瞞……そして醜いほどの欲望……」

笑っていた。
何故かは、分からない。

答えが、見つかったからだろうか。
探していた、答えが。
求めていた、モノが。
そこにはある。



「貴方が望むモノを手に入れなさい。
遠慮することなんてありません。
誰よりもあの子を愛する貴方が、彼女を手に入れて当然♥
渡さない、離さない、という強い気持ちがあるなら、私に私からのささやかな
何かを成し遂げようと頑張っている人間に私からのささやかな
手助けよ……さあ、いらっしやう♥」

案外、この妖怪はいい妖怪なのかもしれない。
ふらふらと気持ちいい香り、誘われ、少年は徐々に女性へと近づいて行く。
既に頭の中に、彼女の言葉が心地の良いモノとして刷り込まれているのか……。
全く拒むこともなく、歩んでいた。

それでも何故か、頭の中に美鈴への想いは確かにあった。

だからこそ、だろうか。
どうすれば彼女の心を手に入れることができるのか、分かっていた。

「さあ、どうすればいいかは分かっているでしょう♥
あとは、そのやり方……ご安心なさい、優しく教えてあげるわ……」

そう。

「美鈴の好きなヒトになればいいんだ」



「あの女になれば……!!」

リファイン-ReFiNe-

サークル名：ブルート
製作者：不動心

一
か
月
後
。

文字通り血反吐をぶちまけるような修行は、突然終わりを告げる。

「合格よ。今の貴方なら、きっと思わがままに……」

余裕のある笑みで、女性の妖怪は言った。目の前にいるのは、かつての少年ではない。修行の名目で心身を鍛え上げ、寝食を妖怪と共にした、人間だった存在である。

出会った時はやや消極的な面もあったが、美鈴のことを想えば自然と力が湧き、どんな修行にも耐えられた。

言動もやや粗暴になり、滾る欲望のみで生きているような存在になりつつある。

「頑張った貴方に、私からもお礼を言わせてもらおう」

「さあ、見せて頂戴……準備は全て整っている」

「咲夜というも、あの山小屋に捕らえてあるから……後は……」

いつものように空間を裂き、女性は満面の笑みで少年を見た。

中にはあるのは、彼も知らないような場所にぽつんと佇む、古びた山小屋だった。

その狭い場所に、あの咲夜が捕らえられているというのだ。

恐らく「知り合いの薬師」にでも、強力な眠り香を作らせたのだろう。

少年も何度となく、修行の段階を引き上げるために服薬させられていた。

その効果は確かなモノだ、信じられる。

「頑張りをさいね」

妖怪がひとつ、少年の頬にキスをした。

死にそうな修行を平気な顔で言い渡す妖怪だ、これまでそんなことは少しも

しなかったが……いや、この心は美鈴に捧げたのだと強く気を張る。

「失敗しても、貴方が死ぬだけよ」

「思い切っていきなさい、死んだら知り合いに頼んで、成仏させたげる」

「でも、もし成功したら……ううん、必ず成功するわ」

「この私が直ぐに、貴方のことを支えてみせますわ」

「成功したのなら、貴方にとって有利になるよう、裏で動いてあげる」

「貴方は、この私が教えた弟子よ」

「胸を張って行きなさい」

それまで激励の言葉を投げ掛けたことはあるが、上辺だけだった妖怪が、キスの後、名残惜しそうに耳元で囁く。

名前も知らない——妖怪だった。

あの妖怪に、名前などないのかもしれない。

偉大な妖怪に心から感謝しつつ、気持ちを引き締める。

別れの言葉などいらない、どうせどこかで見ていたろうから。

気付けば——山小屋の前이었다。

意を決して、その扉を開ける。

扉を開けると、老化した木の匂いが鼻を衝く。侵入すると急いで閉め、中を窺う。どうにか数人が入り込めるような山小屋は、何も目立ったモノはなく殺風景という言葉がよく似合っていた。

その中に——置物の彫刻のような、場違いにも程がある女性が立っていた。

後ろ手に縛られて自由を封じられているが、脚は動くようで扉を開く音に振り返っている。銀髪を少しだけ揺らし、睨み付けるというよりは意外だつたと呆気に取られるような顔をしていた。

間違いない、この状況でも澄ました態度を取るこのオンナ——十六夜咲夜だ。瀟洒を地で行く、近寄りたいたい気高さを持ったメイドが、少年を見ていた。

「あら——久しぶりね、貴方。最近見ないと思つたら……何？
助けに来た王子様じゃあなさそうね」

咲夜は、少年を少し眺めるとそう言った。
ひと目で何か、違和感のようなモノに気付いたのだろうか。



少年も一応男で、咲夜は当然女だ。
狭い山小屋に自由の利かない状況で押し込まれ、恐怖のひとつも浮かべるかと思いきや、なおも凜としてただ立っているだけだ。

それなのに——射殺されるような威圧感を感じる。

やはりこのメイド、只モノではない。修行していなかったら、近付くことさえ容易ではなかっただろう。これだけの容姿、美鈴並みに言い寄る男がいたはずだ。そして、それらがこのように密室へ拉致し、善からぬことを企ててもおかしくはない。おそらく、彼らを葬ってきたから、咲夜は余裕を——。

「説明してもらおうわ。貴方と、裏に潜んでる奴のこと……!!
大体予想は付くけど、やはり貴方は排除しなければならぬ……!!」

誰が説明など——少年はこれまで必死に修行に耐え、習得した術を行使する。自分の肉体を消滅させ、魂となって彷徨う秘術(転心の術)……!!

これが修行の成果だ。

「な、何——これはっ!?」
少年の身体がドロドロと溶け始め、肉体を保てなくなった時、咲夜はようやく驚いた顔を見せた。しかし、もう遅い。

純粋な邪——全く黒い、歪な感情が彼をそうさせているのか。

醜く変貌した男の魂は、咲夜の身体にまとわりつくように蠢き、ついにその悲願を達成する時が訪れたと、心底嗤っていた。
本来の咲夜ならば逃げることも出来よう、しかし今は身体を拘束され、何故か能力も使えないでいたのだ。見知った少年の姿に違和感を覚えつつも、すぐに手に掛けた少年の肉体を見る見るうちに朽ち果て、灰燼と化した。
魂が抜けた少年の肉体は見る見るうちに朽ち果て、灰燼と化した。
今ならば、身動きの取れない女性ひとり、絡め取るのは文字通り造作もないこと。

「自分の身を妖に奪ってまで……哀れな子……!!!
喰したのは誰っ!? 貴方を誑かした妖怪はっ!!!」



今さら何を言っても、遅い。もう、戻れない。
魂だけになって感覚というモノはないはずだが——。

咲夜はやはり、美しい。美鈴が惚れるのも頷ける。
それら全てが手に入り、自由に出来ると思うと——顔がないはずなのに
思わず嗤ってしまうようだった。

「まさか——わ、私の身体を乗っ取るつもりなの……っ!?
バカな真似を——っ!!!」

口元まで近付くと、その愛らしい唇が怯えに震えていた。

そう——この身体は、美鈴に愛されている。ならば、その身体を……。
咲夜の身体を得てしまえば、少年は美鈴に愛される。
そのためにこれまで必死で耐えて来た。この瞬間を、待ち望んでいた。
恫喝するように大きく怒鳴った咲夜は——魂の動く速度を、甘く見ていた。

意を決し、口内へと——ッ!!!

「おッ!!!? お——っ!! おえええええッ!!!?」

少年、いや……ヒトの心をついた魂はついに——咲夜に入り込む。口からの無理矢理の侵入に、身体を強張らせて懸命に拒絶するが、虚しい。聞くに堪えない大声に、強引にこじ開けられた大口。噛み千切ろうとしても魂に触れることは不可能で、拒むことなど不可能。見開かれた眼には、人間ならば経験し得ない、他者の魂という異物の侵入感に対する恐怖、そして驚愕の色が浮かんでいた。

「ハッッッ!! おっおおおぶッ、ええええあぁあッ!!!?」

ズッ
ズッ
ズッ



何とか自分の身体から吐き出そうと、強制的に嘔吐しようとしている。どこが潇洒なのだろう、みっともない——少年は嘲笑うと、より侵入を強める。

おッ
おッ
おッ

(「このままじゃ……本当に、私の身体を……ッ!!」)

咲夜はかろうじて意識を保っているのか、細い線のような己の意識を手繰り寄せ、何とか抵抗を試みていた。

だが——無駄だ。

涎も汗も無様に撒き散らして、喉から体内へ——そして意識の中枢にまで、果てしなく支配されていく。もはや意思とは関係無く、身体はたらないほどに反応していた。脳がめちやくちやにのた打ち回るような感覚はおぞましく、そして、たまらなく甘美でもあった。

少年の意識と同調しつつあるのか、徐々に咲夜の抵抗は薄まっていった。

「んおおおおおッ♡おん♡んほっほおッ♡」
早く咲夜の身体を乗っ取って、美鈴に会いたい。その想いがそうさせたのか、普段の咲夜からは想像も出来ないほどの下品な声。が山小屋に響き渡る。もう少しで、十六夜咲夜の最期だ。この美しい身体を手に入れる、そうすれば美鈴もきつと——



「おおおッ!!!? おおおおッ—— ああああああッ♥♥」

はしたない絶叫は、魂の侵入にくぐもって響くだけで。彼女の断末魔にじては、何ともあつけないモノだった。ただただ力の波に身を任せ、拘束も振り解くほどの強烈な絶頂。
肉体の支配を他者に掌握され、無理矢理に同調させられる苦痛は、押し量れない。

「んんんうううッ♥ が……っは♥ えああ、ああ♥」

孔という孔、鼻や耳からも侵入された挙句、ついに変化が訪れた。力を失っていた身体に、再び生気が宿り——そして、溢れる涙を湛える瞳が、妖しく染まる。

「お嬢さま……わたし……」

一筋の涙が咲夜だったモノの頬を伝い、零れ落ちる。それを見ることは誰にも出来ず、彼女の意識は永遠にここで果て——。



美鈴



「はははははッ♡ やったッ♡♡
成功だッ!!! はあッ……はッ♡」



咲夜が突然、身体を勢い良く起こしたかと思えば……。その瞳に宿る色は濁りきり、唇に浮かべた笑みは歪んでいた。何かを嘲笑うような、下卑たモノに変わっていると言っで間違いない。

口から、鼻から呼吸器を通して息をすること、そして身体を動かせること。声を出すことにすら感動するように、奇妙なほどに肉体の歓喜に打ち震える。

ねっとりとした視線は、女性の身でありながらオトコのソレであった。眼下に広がる、これまでと違う世界——それは、すなわち。

少年が咲夜の身体を乗っ取り、初めて見て感じる、咲夜の世界であった。

「美鈴も全部オレのモノに……」
「この身体（心）能力も……」
「はあッ、すっげえ軽い身体」

喉を震わせて喋ることすらも愉快なのか、実に愉しそうにひとり呟いている。自らのことを「オレ」と呼ぶと、それを「咲夜」に言わせているという支配感、そして美しく気高い身体と精神を完全に掌握し、乗っ取ったという達成感に打ち震えた。

「はあッ、すっげえ軽い心……」
「この細さ……これ手が……」
「細すぎ、折れんじやねえの……それに比べて……」
「美鈴ほどじゃねえけど、ながなが……」
「大きいとは思ってたけど、柔らかい……」
「手が……」

オトコとは明らかに違う、女性の手を自らの目で見据える。それほど不思議なことではなかったはずなのに、今の「咲夜」の全身は全くの別人だ。嬉々として自らのあちこちを弄り、その肉体の反応を愉しむ——異常者。そして、胸の膨らみに右手を添えたと思えば——乱暴に揉みしだく。

形が変わってしまうのではないかと危惧されるほど、豪快な手さばきだ。そこから熱がジンと生まれ、乗っ取ったばかりの肉体が火照りを呼ぶ。憑依されていても、肉体は「咲夜」のまま。性感には抗えない。むしろ、精神が少年に乗っ取られていくことで、オトコでは感じ得ない快感に従順であり、さらに快樂の波が強く押し寄せていた。



服が乱暴に擦れる音が響くだけの山小屋。徐々に、咲夜の吐息が荒くなっていた。

「うはアツ♡ 何ていやらしい身体なんだ……どこ触っても柔らかい♡ オレが……あの咲夜をいぢらし顔にさせてる♡ くらう最高だぜ♡ いっつも短びスカードで美鈴を誘惑しやがって♡ このドスケベ女だ♡」



声を出す度に、その都度駆け巡る興奮作用。オトコである少年に肉体を支配され、その声も容姿も利用されている。その事実が脳を渦巻き、全身へと直結した神経を伝い、快感を生んでいた。

今なら、いやこれからは——どんな淫語でも、ふしだらな行為でも、自由だ。お淑やかにする必要などない。ガニ股で歩こうが、男のような口調になろうが、この身体を好きにしていれば、と……咲夜は滴る唾液も拭おとせず、下卑た笑みを浮かべた。

「……アツ♡の身体だ……♡ 好きでやっつけてもらって♡ なあ咲夜♡」

隠すべき陰部をぐちゃぐちゃに掻き回せば、当然快樂が生まれる。
しかし、咲夜は左手に添えた乳房とその尖端——淫らに尖った乳首も忘れない。
オトコの身体には決してない、女性としての膨らみを揉みしただけは、そこから
うまく言葉に出来ないほどの、甘く濃い劣情が浮かんでくるのだ。

「おのののこの感じ最高だぜッ」
「オナオナするのは皆んなに感じるのかッ」
「それともこの身体だけかッ」
「とにかく……はあああッ」
「最ッ高ッ」
「美鈴に揉ませてオレも美鈴のを揉んで……ははははッ」

女性の身体にオトコの魂が入っただけで、こうも乱れるモノか。
澄んだ清らかな声を下品に濁らせて、咲夜は唸るように感じ入る。



「おッ！ おおおおッ」
「ここだけ特にすげえッ」
「マッがたッ」
「コレ——」
「クソッ」
「ストリスッ」
「コレヤッ」
「ベッ」
「あああああああッ」
「へ、変な声でちやんすッ」

それまでただ女陰を弄んでいた咲夜が、突然走ったピンク色の電気に跳ねた。
指が当たっただけで、無意識にお尻や太腿が反応し、ビクビクと震える。

おそるおそる、もう一度触ってみると——野太い喘ぎ声を上げ、身体が震えた。
淫核の快感、それはオトコでは到底感じ得ない未知の快感だ。

「イケてるッ」
「咲夜の肉体でイケてるッ」
「そっからッ」
「ッ」

「ああ、すげえ快感……はあああああああッ♡
オシナの方が、オトコよりイキ方が強い♡うふ♡
まだイキそうになっちゃうたぜ♡この身体、敏感ッ♡」

ようやく絶頂の渦から這い上がって来た咲夜。
メスの湯気が立ち昇り、未だに身体を不規則に蠢かしては、余韻に浸っている。
言葉では女性の絶頂を称えつつも、その口元には怪しい笑みが浮かんでいた。

「オシナの身体もいけなさあ♡
この肉体でオトコの快楽を味わうつても……♡いゝなあ♡
うひひひ♡咲夜♡お前の身体、オレに相応しい♡」



先程絶頂したばかりだというのに、咲夜は再び股間を弄り始めた。
いや、今までとは違う。今度は乱暴にするだけではない。

まるで何かを誘うように、優しく女性らしい手付きで陰部を撫でていた。
「さあ出て来い♡オレが出来るまで、今まで修習してきた意味が
ねえっ♡」

何かを言い終えようとした時、明らかに咲夜の肉体とは異なる鼓動が鳴る。
それは力強く、そして「咲夜の内側から」伝っていた。
何を意味するのか……それはつまり、咲夜の身体が取り返しの付かないところまで
造り変えられようとしているということだ。
女性でも男性でもない、この世のモノではありえない存在へと――。

「オレのチ○ポおおおおオオオオオオッ♡」

「イツー——グううウウウウッ♡」

「おおっおおおおおおおおおっ♡」

「ほっお♡ おっほおおおおおっ♡」

もはや獣欲の塊、と名付けても差し支えないほどの、強烈な射精。まともな人間では感じられない快感は、精子を吐き出し続けても止まない。

「射精止まんねッ♡
チ○ホ止まッてッ♡
キンタマ精子発射しきれないッ♡」

トドメを差し切れないのか、咲夜は手を止めずに射精し続ける。完全に色に狂ったオナナと化した……。股間にある剛直、そして陰囊は決して取れず、その精神は邪悪に乗っ取られたままだった……。



グニッ

「こちらも、やりたいことが出来た……感謝致しますわ、咲夜♥
随分と可愛くなったじやないボク♥ 綺麗な身体はどう？」

「ふん……だがまあ、これからはオレが咲夜だ、慣れとかないとな
とるで、アンタ、美鈴に何かしてないよな……？」

そこまで広くない小屋の中に、突然紫色の「空間の裂け目」が生まれた。
その中にいたのは、今は咲夜の肉体に収まっている少年の師……あの妖怪だ。
恐ろしい妖力を漂わせながら、余裕の笑みを浮かべている。
どうやら、弟子が首尾よくいったことに満足しているようで、まるで親の眼だ。

しかし、咲夜と言えは、あまり浮かない顔をしていた。
この妖怪、実力は確かだろうが、全く底が知れない。今もこうして空間を裂き、
成功を称えてはいるが、その本心を見ることなど到底不可能なのだ。
今も「やりたいこと」と言ったが……それは果たして、咲夜の望むことか？
もしも美鈴に何かをしたとあつたら……黙ってはいられないだろう。
咲夜本来の魂と混ざり合ったとでもいうのか、美鈴に対する想いが溢れていた。

「うふふ♥とつてもお熱で、お姉さん届けちゃう♥
あの子は幸せねえ、こんなに愛してもらえて♥ 羨ましいわあ♥」
「質問だ答へらあ……ふんふん……許さねえぞ」



帰るとするか……オレの居場所に♡

アッ!

紅魔館、夕方。

「ん〜……♪ 今日も異常無し、と……」



美鈴は、今日も紅魔館の門に立っていた。

風によくたなびく紅髪。衣服の切れ込みからスラリと伸びた健康的な脚。夕方の光によく映えるその影は、この地に墜ちた太陽のようで——美しい。ただ、どこか——いつものような明るい顔ではあるが……物憂げを感じた。

「最近……あの子、来なくなっちゃったな……。
また、来ると言ってたけど……どうしたんだろう」

心の中に、ずっと引つ掛かっていることがあった。
ひと月前のことだったが、昨日のように思い出すことがある。

あの——少年のことだ。

咲夜は大して覚えていないのか、それとも美鈴を傷付けないように察したのか、少年については言及しなかった。悲しいことになっていなければいいが……。
人間というモノは皆が皆、咲夜のように強いわけではない。
妖怪に、そして強い存在に常に脅かされる。弱い存在なのだ。
知恵があるとはいえ、あの子の身にも何か——

「……うん、きっと……また、会いに来てくれる……。
お話しに、来てくれる……笑いながら、また……」

グ
オ
ン

「て、敵襲ッ!? この気は……あの妖怪の!?!」



気の流れを扱うことに長けている美鈴は、すぐにその異常な事態に気付く。今、目の前に急速に発生した力場がある。空間自体を捻じ曲げるような、強烈な力——心当たりのある妖怪の力だ。空間の裂け目からも滲み出る、妖力の残滓……美鈴はすぐに構えようとした。しかし、その中から出て来る女性の姿を見て、美鈴は身体よりも頭で反応する。

「え……ッ!?!」

「やれやれ……何回通っても慣れんな、あれは——ッ!?!」

ふたり同時に、固まる。お互いの想い人に出会ったというのに。不気味な音を上げながら、空間の裂け目が納まった後も——。しばらく、動けないでいた。

ガッ

「さ、咲夜さん………今は、一体……アレは……」
（美鈴……美鈴……ッ!! そうか、アイツめ……!!）
（だが、そうだと……これは好都合かもなッ!!）



「美鈴……オレの……好きなの？」

「え——ええええええええッ!!
咲夜さん、と、突然何を……」



試すような問い掛けに、美鈴は困ったような、嬉しような反応を見せる。
乗っ取った咲夜の身体を前に、本来とは違う素振りを見せても——どうだ。
顔を紅らめてモジモジし、美鈴はとほけたように咲夜を見つめることが出来ない。
この肉体には見せない応対というのが少し悔しい気もするが、今は構わない。
次に出る言葉は、きつとそんなちっぽけな感情を全て吹き飛ばすだろうから。

「どうなんだ？ 咲夜のこと、好きなんだろ？……美鈴」

「そ、それは……好き、ですよ……咲夜さんのこと」

恥じらいながらも——ついにその言葉を聞いた。
やはり、美鈴は……咲夜のことを好きだったのだ。
過ぎた時間も、場所も、何もかも男だった時とは違う。完全に有利な状況。
自然と笑みがこぼれ、その好きだという咲夜を手に入れている事実、ほくそ笑む。

「な、何だかいつもの咲夜さんじゃないみたいですね。
積極的っていうか……あはは」

美鈴は、気付かなかった。
戸惑っている間に——。

好きと言った咲夜が
近付いていることに。
一瞬でも、気を緩めた。
それが、隙を与える。



「あ、あのう……咲夜さん、何だか近——」

「オレも、美鈴のこと好きだ——大好きだ……!!
だから、キス……しよう、美鈴……ッ♡」

「咲夜さん、何か変——んんッ!？」

「んんッ♡ んああああ……美鈴……んむッ♡」

何かを言いかけて口を開けた美鈴を、咲夜は有無を言わず唇で捉えた。咄嗟に手で抑えようとしても、胸が押し潰されるほどの勢いがあったため止められない。背中にまで手を回され、最も敏感で大事な部分である桃色の柔肉を触れ合う。混乱と興奮、理性も本能も掻き回されるようなキスは——唐突だった。



「んはあ……くちゅッ♡ んちゅッ♡ んぶっあ♡ んんむうっ♡」

咲夜という肉体で感じる、初めての他人は美鈴だった。自らの身体も女性になっていくが、「ニ」まで誰かに近付いたのは初めてだ。匂い、吐息、髪や身体の感触全て。美鈴という存在が愛おしくてたまらない。もっと愛そうと唇を押し付けてやる。咲夜でなければ感じ得ない、考えられる最高のキスだ。愛し合うふたりの存在である以上、これくらいの行為は当然——と力を入れた。

「あああ……柔らげえなあ♡ それにイイ匂いだあ♡ んえああ♡」

「んむッ!?」 咲、夜さん——ど……どうし——んちゅ、うむうらッ!?」

いくら想い人とはいえ、いきなりの口付けには美鈴も困惑していた。
手で逃げようとしても身体を押し付けられ、唇は食欲に動いて離さない。
唾液が零れ落ちるのも気にしないのか、ただ欲望に任せた口辱に酔い痴れている。
ほんの少しだけ言葉紡いだかと思えば、汗を浮かばせて再び美鈴を蝕んだ。
咲夜は明らかに興奮し、美鈴は緊張と困惑に冷や汗を流す。
対極的な心情だったが、美人同士のキスは淫靡だった。



（こ……こんな……咲夜さん——痛いんですけど、ごめんなさいッ!）

明らかに異常だった。鼻息を荒く鳴らし、喉まで蠢くようなキスをするなど。
今の咲夜から、美鈴は一刻も早く離れたかった。懸命に逃げようとしても、咲夜の
舌は獲物を追いつける蛇のようで……唾液も絡め、濃密に湿り合ってしまう。
ねちこく、いやらしい責め方は——美鈴すらも快感に溺れてしまいそうだった。

だから——口を塞がれている以上、心の中で謝るしかない。

身体中の気を練り合わせ、吹き飛ばす——気爆波なら……。



「お前たち、館の前で何やってるんだ」

「お、お嬢様っ!？」

（邪魔が入ったな……お嬢様、か）



音も無く、館の主——レミリアがふたりの間に降り立つ。吸血鬼らしく、空を優雅に飛んで来たのだろうか。夕方とはいえ、外まで来るのは珍しい。美鈴は驚く一方で、助かったと思った。咲夜の変容を伝えるには、今がいい。レミリアも幼い容姿とはいえ、やはり主なのだから……。

「お嬢様、お話が——」

「何かしら？」

（……美鈴、オレのことさうふん、言いたさや言え。ここで止めると厄介なはずだ。どうとでもなるさ、咲夜の記憶を使えばな……♡）



「咲夜さんが……」

美鈴は言い淀むことなく、素直に口を紡ぐ。

しかし——。



ひと言聞いただけで、レミリアは全てを理解しているように。頷いた……そして、呟く。

「ああ、咲夜と貴女が、愛し合っているところだね♡」

「おアツいのは構わないけど、誰かに見られてるかもしれないとか、考えてほしいモンだわ。ほんとにねふたりとも」

「お……お嬢様……っ?!」

「館全体がそう見られてしまってもね、色狂い共っ♡ はははッ♡」



仕えるべき主人から出た言葉は――。

美鈴を絶句させ、その胸中を驚きと絶望へと叩き落とす。咲夜のことを心配するどころか、美鈴を助けるどころか。

美鈴にとつて、この答えは突き付けられた刃。喉元に、圧倒的な力を添えられた気分だ。

「お嬢様……お嬢様はっ!!
そんなこと……っ」



「美鈴へ私に口答える気? 別に禁止してあるわけじゃない。むしろ私の前でしてみせて。きつと昂るわ……貴女たちもね」

「お嬢様、まで……どっして……っ」

「ふうん、あの妖怪が言ってたのはこれか。美鈴、これで逃げ場は無い……あとはお前だけだ……♡」

レミリアまで、豹変した。咲夜の肉体を乗っ取った際にあの大妖怪に言われた言葉を思い出しつつ、次第を見ていた。

美鈴を護りそんな連中の頭の中を変えていたのだ。あの妖怪なら、悦んでやるだろう。サポートに感心と感謝しつつ、咲夜とレミリアは等しく、妖しく嗤った。

「さあ、咲夜♡ 邪魔して悪いけど、食事を用意して♡ このままだと私、人間を襲いに行ってしまうそうよ♡ 若い血が欲しいの♡ 新鮮で濃厚な乙女の血がね……♡」



「長まりましたとお嬢様♡ 人間を襲うのはお待ちになつてくださる♡
腕を振るってこの咲夜が満足させて差し上げますので♡」
「さ、咲夜さん……良かった。
やっぱり咲夜さんだ……」

「ふん♡」

羽根をウズウズとさせて、今にも人里に飛んで行ってしまいそうなレミリアを諭したのは、咲夜。紅魔館のメイド長として、家主の機嫌は損ねない。少しだけ脚を開き、何やら重さのあるモノをスカートから浮かひ上げさせた。試すような視線をぶつけければ、レミリアもまた好色じみた瞳で睨み付ける。

「咲夜、自信はあるんだろうなあ？」

「もちろんですよ♡
とびっきりの一品を……♡
心ゆくまで堪能ください♡」

（な、何だか口調が……。
いつもよりねちっこいなあ……）

ねっとりとした会話を愉しむ咲夜——その言動は、乗っ取った肉体から得た、
本当の咲夜の記憶を利用した行動だったはずだが……やはり、支配している
精神の影響か、女性のつもりで話してもいやらしさが滲み出ている。
今までの変貌と比べれば些細なことで、美鈴は気付いても気にしなかった。

主従ふたり——。
熱い視線を交わしている。

「それじゃあ、部屋で待ってるわ♡」

「はあい♡ 美鈴、またね♡」

レミリアは再び、音もなく飛び去り館に戻る。
咲夜は去り際のウイングを美鈴に投げ掛け、名残惜しそうに唇に手を当て
時間を止めたのか、いつの間にかいなくなっていた。
美鈴の心に、楔を残したまま……



紅魔館、夜

紅魔館の中をひとり、美鈴は迷い無く歩いてきた。こんな夜更けに館を訪れるモノもいないはず、せいぜい魔法使いくらいだろう。門番としての仕事を少しだけ放棄してでも、美鈴は行かなければならない。

咲夜の自室だ。

（今日、出掛けるまでの咲夜さんは……普通の咲夜さんだった……）

紅魔館の離れに、その部屋はある。メイド長として示しが付かないからと、レミリアが強引に与えた、ただひとり人間のための一室だ。普通に歩いていけば気付かないような廊下を抜け、角を曲がり……迷わず進む。考えていることは、豹変した咲夜のことについてだ。

（あんなことを……いきなりするヒトじゃ、なかった……）

お嬢様も、どこか変だし……



思い出せば、あの唇の感触も浮かぶ。

柔らかく甘美な触れ合いに、女性を強調するような仕草。

ねっとりとした視線を美鈴に向け、瀟洒とは程遠い印象を受ける。

おまけに、レミリアさえも「かヒト」が変ったようになってしまっていた。

吸血鬼である以上仕方の無いことだが、血を如実に欲するなど……

美鈴ですらも見ただことのない、ふたりの表情——そして言動。

館全体から感じる視線のようなモノを受け止めつつ、少しでも美鈴なりに真相を突き止めようと、こうして歩を進めているのだ。

カクカク

「咲夜さん、美鈴です……入っていいですか？」

『カクカク』

軽いノックと問い掛けの音に帰って来たのは、違和感を覚える、あの咲夜の口調。美鈴は事態の原因を少しでも探ろうと、部屋の扉を開ける。恐る恐るではなく、あくまで同じ館の住人として——

「失礼します………咲夜さん？ あれ……？ ……っ!!？」

咲夜の部屋を開けたはずの美鈴は、異様な雰囲気にも身を強張らせた。

違う——直感が、そう告げていた。

いくら吸血鬼の館といえど、人間である咲夜の部屋はかろうじて人間的で、妖怪である美鈴がいくらか安心できるほどに、温もりが感じられたはずなのに、今、感じているのは……立ち込めるような【熱気】だった。

それは美鈴も感じたことのあるモノだが、この場所には似合わない【匂い】だ。女性が喰い、そして喰われる時の、互いが互いを貪る、性の迸りを思わせる、他者を狂わせる魔性の気……それが、咲夜の部屋から感じられるなんて——。

美鈴は何があってもいいように構えるつもりで、暗い部屋に歩を進める。

「こつちから行く手間が省けたぞ♡ あの吸血鬼をめちゃくちゃにした後、お前のとこに行くつもりだったけど……ふふッ♡」

ピクリ、と美鈴は動きを止めた。

視線だけで声の主を——部屋の持ち主を捉え、睨む。

吸血鬼とは、間違いなくレミリアのことだろう。

それを……やはり今の咲夜は、思っているような咲夜ではない。静かに息を吐くと、美鈴は怒気混じりに呟いた。

「……貴女は、咲夜さんじゃない——誰なんですかつ!!？」

「ふふふッ♡ どうして、美鈴？ 私は咲夜♡ 貴女の大好きな、メイド長の咲夜——」

「咲夜さんのフリを……しないでください——ッ!!」

「残念だがな……もう全て、オレのモノなんだよ♡ この肉體も♡ この記憶も♡ 心も感情も能力も立場も——全てッ!!! オレのモノなんだよ♡♡」

灯りが揺らぎ、部屋がさらに照らし出される。

浮かび上がったシルエットに、美鈴は言葉を失い——咲夜は唾った。

「はあッ♡ 美鈴の匂いでまたチンポ勃ってきたッ♡ 勃起するッ♡ オレのチンポに咲夜の血が通って♡ キンキンになるッ♡」

「……え……あ……さ………咲夜、さん………」

「驚いた顔もまたそそのなあッ♡へへへッ♡早くチンポ突っ込まれたくて、オレんとこまで来ちまったのか美鈴♡ ホントに可愛いヤッ♡ はああッ、イイ女だよお前は♡」

もはや 咲夜ではない。咲夜だった何かで……違う存在だと思えるほど。容姿だけは咲夜に似ている、と考えた方が、美鈴はいくらか幸せだったのか……。裸体を誇らしげに見せつけ、部屋に立ち尽くす咲夜。その股間に生えるモノ。見間違えるはずもない、男性器だ。しかし、悩まげな肉付きは当然女性であり……丸みを帯びている。

「造り変えられた」のだ——美鈴の知らない、邪な何かによって。



「どうして……どうして、咲夜さんを……こんな風につ!!! ひどいつ!!! ひど過ぎますっ!!!」

「ひどいだよ、美鈴、お前だってひどいじゃないか♡ せつかくのオレの告白を振りやがって♡ でもいいさ、今はこの肉体を待って、最ツ高の気分だぜ♡ どうやって美鈴と、見つめ合えるからな♡ あははははははッ♡」

「……っ!!! まさか、貴方は——ひと月前の……っ!!!」

いや、違う。美鈴は知っていたのだ。彼のこと……とある少年のことを。青々しくて若い命と今、まさに咲夜の肉体を介して邂逅したのだ。禍々しいまでに穢れきった魂となつて、最愛の女性へと憑依した彼のことを……。美鈴は怒りと、悲しみに溢れた瞳で睨み付けていた。

「許せない………咲夜さんを返してくださいっ!! 今すぐ戻っ!!」

「許せない、だあ? 美鈴、分かってないみたいだな♥ オレは、
今↑「咲夜の身体を手に入れてる」んだ——っ。ま。り♥
もう咲夜の意思も心も無いんだよッ!!! このチ○ポが証拠ってこと♥
二度と返すか、こんなにイイ身体……おつと美鈴、早まるなよ♥
お前が変なことを考えたら……この綺麗な身体がどうなるかな………♥」

「……っ!!? 貴方は、そこまで堕ちてしまったんですかっ!!!
もう、貴方は——私の知っているヒトじゃないっ!!!」

美鈴の知っている少年とはかけ離れた、他人を弄ぶことを愉しむ様に、美鈴は叫んでいた。咲夜の肉体を利用し、盾にし、情や精神を揺さぶっているのだ。許せない——許せないが、入り込んだ魂を吹き飛ばすなど、美鈴には……。かろうじて成功したとして、咲夜の身体は無事でいられるだろうか。あの血肉で繋がった醜悪な肉棒を、かつての咲夜は受け止められるだろうか。女性の身体には不釣り合い過ぎる逸物を、美鈴は憎らしげに睨み付けていた。それに呼応するように、グンツと反り返っては、脈動を重く伝える。



「そんなに見つめるなよ………♥ おほッ♥ ギン勃起になっちゃっせ
お前も、本当は咲夜と繋がりがかったんだろ♥ ほら、これでさ♥
このチ○ポで……ドロドロになるまで、愛し合いたかった」

「止めて………止めてください………っ………咲夜さんの声で………私に………」

「イイねえ………その顔♥ やっぱお前は最高だ、美鈴………♥ うん♥
さあ、どうすればいいかは分かるわね♥ 貴女も裸になるのよ………♥
でないと———そうね、このまま外に出るっていうのは♥」

「……っ!!? 待って、ください………っ!! お願いします、待って………
貴方の望みは私なんですよっ!! だったら………分かりました………」

半ば脅しにも似た言葉に、美鈴は従うしかない。あの凶暴極まりない怒張を受け入れれば、満足はしてくれるだろう。自分の罪を数えるように、美鈴はゆつくりと身に着けている衣服を脱いでいった———恐怖に、震えながら………。

カチッ♡



「遅いんだよ—ああ、もう我慢出来ねえッ♡」

「んっぶっ!!」んおッ♡んぶっ、んぬっ♡はほっ♡んんんっ♡

「オラッ♡しゃぶれッ♡オレの子○ポしゃぶるんだよッ♡
喉の奥まで唾え込んで、涎でグチャグチャにしてみせるおおッ♡」

美鈴が裸になった瞬間、**美鈴**は己の力を使って、**襲い掛かっていた**身を隠すように、**しおらしくうずくまる美鈴**に、思い切り肉棒を突き入れている。何が起ったか分からない**美鈴**は、何が言おうと必死に抵抗するも、虚しい舌の動きでオス臭い肉棒を舐め上げ、自らの唾液をまぶしてしまふ。苦しさで悲しさで涙を浮かべるが、同時に**美鈴**の身体から漂う甘い香りに、本能が疼いてしまう。この女性を愛していること、**変わりはしない**のだ。たとえ精神が拒んでも、身体は反応してしまう。



「腰を突き入れてやるぞッ♡くううう美鈴の口マ○コイイッ♡♡♡
キンタマ疼くらッ♡あれだけ吐き出した精子増産しちゃうッ♡♡♡」

（どうして……どうして、こんなに身体が気持ち良いの……♡
美鈴さんの身体を舐くされてしまったのに、心は違はずなのに♡
わ、私も疼いて……胸の奥が……アソコが熱く……♡♡♡）

オトコのように腰を振りたくり、**美鈴**は美鈴の口を激しく犯す。互いに愛し合っている身体だから、本来ではあり得ない淫らな場であっても、ふたりは奥底に秘めた欲情に火を点け、燃え盛っていた。相性が良いのだろう、裸の両者を阻むモノなど、何ひとつ無かった。

(咲夜さんじゃないのに……咲夜さんの身体を使って、私と……
こんな無理矢理で、乱暴にされて——どうして……ッ♡♡♡)

自分自身に問い掛けるも、喉の動きで思考は押し潰されてしまう。
咲夜の肉体と交わることを、本能的に受け入れてしまっているのだ。
たとえ醜く変えられたとしても、器は咲夜——それが、少年の狙いでもあった。
理性をドロドロに融かされ、美鈴の愛する存在を拒むことなど不可能だ。

「クソッで行こう」
美鈴♡

ド
ク
ソ
ッ
！
ド
ク
ソ
ッ
！

待ちかねてはいけなかった言葉を聞いて、美鈴の鼓動は一気に高鳴る。
黒い衝動は禁断の快楽を求め、貪欲に身体を昇らせた。
受け入れる言葉を紡いでしまうまで、長い時間は掛からない。
名残惜しそうに、獣欲をふちまけた肉棒を離し、期待と恐怖に怯えて答えた。

「はい……♡」

「ああ……これが……これが——美鈴のマ○コ♡♡♡ ようやくだ
ようやく……オレが、美鈴とセックス出来るんだ……はああッ♡♡」

「ひやあうッ♡♡♡ 息、吹き掛けないでくださいよう……♡♡♡
ごくッ♡♡♡ こ、これが咲夜さんのチ○ポ——改めて見ると……♡♡♡
お、大きい……♡♡♡ こんなのを私が、啜えて……♡♡♡ そ、それで……♡♡♡」

咲夜ひとり用のベッドに女性がふたり乗ると、さすがに重いのか軋んだ音がする。
しかし、この鈍い音さえも興奮剤になって——これからの行為に、それぞれの
期待が膨らむようだった。

まじ

「はあッ♡♡♡ 美鈴♡♡♡ 美鈴のおっぱいで包み込んで……♡♡♡」

「む、胸で……♡♡♡ どうですか——ううううう……♡♡♡」



「んちゆるるッ♡♡♡ はあもッ♡♡ れろろれろおおッ♡♡ オラッ♡♡
 イけッ♡♡ みつともなくイクんだ美鈴ッ♡♡♡ イけッ♡♡♡♡」
 「ひやあああああうッ♡♡♡ 喘んじやダメッ♡♡♡ 喘まないでええッ♡♡
 大事なところなんです」
 喉をさつあああああッ♡♡♡

自分の行為で好きな女性を絶頂させることに躍起になっている美鈴は、容赦しない。甘噛みのつもりが結構な力で淫核に歯を立てると、美鈴は電撃が走ったように反応し、甘い声と吐息を零した。抵抗するよう胸の上下運動を早めると、美鈴の肉棒のはけ口——鈴口からは白濁きみの液が溢れ、精の迸りに備える。ペットが悲鳴を上げるほどに激しい行為は、どちらが先に絶頂へ導くか……勝負のようでもあり、淫らなメスたちが競い合って快感をもたらしていた。

「へへへッ♡♡♡ ピクピクしてきたぞッ♡♡♡ ほらイクんだッ♡♡♡
 喉夜の指で、口で、目の前でイツちまよええええええッ♡♡♡♡♡」

「あああああッ♡♡♡ ダメッ♡♡♡ もうダメですッ♡♡♡ イッ——」

「はぁあッ♡ はぁッ♡ — ああッ♡ おッ♡♡♡」

「ははははははッ♡ イッた♡ 美鈴がイッたぞおッ♡ オレでッ♡
咲夜の身体でイッたんだッ♡ 愛してるぞ美鈴ッ♡ 大好きだッ♡
何回でもイクところが見たいッ♡ もっともっとオレに — ツッ♡」

豊富な身体を何度も痙攣させ、美鈴は芯まで焦がすようなオナナの絶頂を貪る。
女性として最高に輝いている瞬間を眼前で見つめ、最愛のモノである美鈴が
自分の愛撫と行為によって達したのだと思うと、肉棒が限界にまで張り詰めた。
口早に愛を述べると、我慢出来ないと言わんばかりに身体を蠢かす。
まだ絶頂の余韻を噛み切れない美鈴をよそに、咲夜は欲望に忠実だった。



「……………全てを — 見せてくれたッ♡♡♡♡」

「ゴクツッ……………美鈴、イクぞ……………ひとつに、なるんだッ♡♡♡
オレが宿った咲夜の肉体と、美鈴の肉体が、ひとつに……………いひッ♡♡♡
マ○コ当たってるウツ♡♡♡チ○ポの亀頭がにゆるにゆるに当たって♡♡♡
気持ち良いッ♡♡♡イイな美鈴ッ♡♡♡このまま、一気に————♡♡♡」

半ば放心状態の美鈴を押し倒し、ベッドになだれ込む。
どこから見ても極上の肢体を見下ろし、咲夜は狂乱した様子で肉棒をあてがう。
濡れに濡れ、愛するモノを受け入れる準備が整っている美鈴の女陰は、熱くうねり
肉棒を待ち構えては小さく開閉していた。
その淫靡な光景に、極太の男根を一気に押し込みたくなる。
咲夜は奥歯を噛むようにグツとこらえ、美鈴がどんな反応をするか窺っていた。

「……………咲夜さん……………来て、ください♡」

聞きたかった言葉が、解き放たれた。

愛し合うモノ同士、何を拒む必要があるのかと、美鈴も分かったようだ。
媚びるように咲夜を見つめ、瞳を潤ませて施しを待つ。浅ましい犬のようで、
たまらなく美しい。これからは、それら全てが手に入る。手に入れたのだ。
望む時にまぐわい、望む時に甘美な頂へと至る。自分にしか見せない顔を持つ、
最愛の女性を……………

「……………ああ♡♡♡挿入さぞ、美鈴……………♡♡♡」

「入ったくひッ♥ 何だコレ♥♥♥ オレのチ○ポ、美鈴に入ってるッ♥♥♥ 熱くうねって♥♥♥ このエロマ○コがき、気持ち良すぎてうっかりイキそうになるッ♥♥♥」

「さ、美鈴さんのチ○ポが……私の膣内なつかに入ってる……ッ♥♥♥ あッ♥♥♥ 熱いッ♥♥♥ お腹の中までいつぱいになるみたいなの……大きくてッ♥♥♥」

挿入は滑らかで、その心地良さに美鈴は顎を反らす。美鈴も同じだ。ふたりとも館に住んでいるモノが赤面するほど浅ましい嬌声を奏で、喘ぐ。性のぶつかり合いは始まったばかりだというのに、早くも快感が上り詰めていた。

「う、動くぞ……オレの、美鈴……ッ♥♥♥ マ○コかき回すッ♥♥♥ オレのモノだ……オレの、美鈴……ッ♥♥♥」

「来てッ♥♥♥ 動いてください、咲夜さん……全部、受け止めますッ♥♥♥」

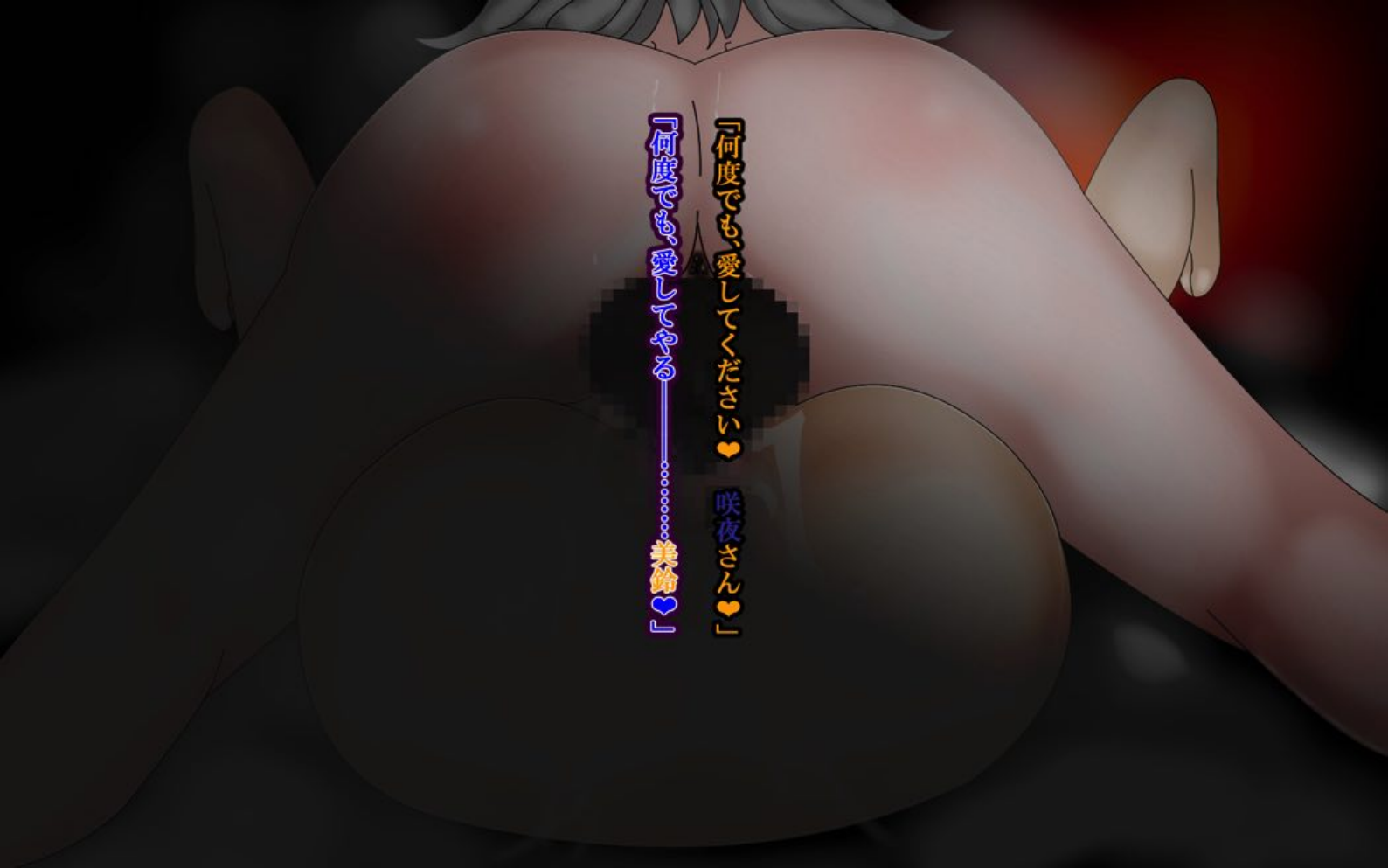
愛液が溢れているのは、美鈴が今の咲夜を受け入れた証。肉棒を締め付け、決して離さないように甘えてくるのは、求めている証拠だ。ベッドの上でせつなさを吐き出しながら汗を浮かべる美鈴は、咲夜にとつてたまらなく愛おしく見えた。

だから……壊したくなるほど、愛したい。

「イクぞ……もう、止められないッ♥♥♥」

「お願いしますッ♥♥♥ 私を、私を……愛してください、咲夜さん♥♥♥」





「何度でも愛してください♡ 咲夜さん♡」

「何度でも愛してやる♡.....美鈴♡」



トク...!

トク...!

ある日。



今日もまた、**紅魔館**の門に**美鈴**は立っていた。

いつもと違うのは、どこか浮かない表情をしていること——それに。

引き締まった身体は熱い火照りを忘れられないのか、持て余すように落ち着きがない。大きな胸を上下させてため息を吐けば、どんな女性も羨む艶姿になる。すらりと伸びた脚は、女性としての悦びを覚えたようにムッチリと肉が帯びて、色ツヤも相まって誰かを誘惑しているのかと思えるほどにいやらしい。

彼女はもう、変わってしまった日常の中にいた。

【**変わっていない**】頃とは、何も変わっていないのだが……………。
生き方を変えるほどに、変えられてしまっていた。

美鈴♡♡

今日もまた……………彼女**は**来る。**紅魔館**のメイド長として、**美鈴**の恋人として。

「はッ♥ さ、咲夜さん……ッ♥」



「異常無し、だな
今日も」苦勞様……ご褒美、やろつか♥」

「……ッ♥」

「ご褒美、と聞いただけで美鈴の身体がビクンと跳ねる。何に期待しているのか——しかし咲夜は、その反応すらもよく躡けられている犬を見るようで、微笑ましいのかニタニタと下卑た笑みを浮かべていた。何度も雌芯を蹂躞され、内側から身体を変えられてしまったのか……美鈴は咲夜の肉体を乗っ取った少年のことを覚えてはいるのだが、今の爛れた関係に溺れてしまっていた。二度と戻れないところまで互いを知り尽くし、毎夜として肌を重ねていた。」

つまり、「ご褒美とは——」。

「ぶぶッ♥ そう焦るなよ♥ オレはいつでもお前の傍にいる♥
ずっとならぬだ、美鈴……これからもずっとならぬ——♥」

与えられる悦びに胸を膨らませ、美鈴は施しを待つ。どうやら、口付けのご褒美のようだ——その先はまた、夜にでも。いくら味わっても、この快感からは逃げられない……永遠に。



fin



◆あしがき

この度は【リファイン-ReFiNe-】をご購入いただき、ありがとうございました。
また、最後まで読んで頂きまして大変嬉しい限りです。

今回の作品は、過去に作者がpixivに投稿した作品【東方ダーク系憑依・乗っ取り】というモノが元になっています。単純に作り直しているのて、リファインというわけですね。

もちろん【造り変える】とか【精練する】という意味もありますので、咲夜や紅魔館の中が変わっていることもまた、繋がって捉えられるタイトルになっております。

初めての販売作品ということで、右も左も分からずただガムシヤラに創りました。
自分の好きなシチュエーションを詰め込み、ひとまずはやったという感触があります。

まだまだ拡げていきたいジャンルもあります。精一杯精進致しますので、ご期待ください。

**※18歳未満の購入閲覧 及び
インターネット上への無断転載を禁じます。**

サークル名：ブルート
製作者：不動心
連絡先：pixivID 【3767622】
Twitter @hudo_shin